

聖書：コリント人への手紙第二 8：9～15

説教題：平等になるように

日時：2025年1月19日（朝拝）

前回見た8章1節から、この手紙のテーマはエルサレムの貧しい聖徒たちのための献金プロジェクトに移っています。この援助献金については先の第一の手紙16章1節で次のように述べられていました。「さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたとおりに、あなたがたも行いなさい。」しかしその後、パウロとコリント教会の関係が悪化したためか、コリントにおけるこのプロジェクトのための活動はストップしていたようです。しかし関係が回復したことに基づいてパウロは再びこのアピールを行っています。

その際、まずマケドニアの諸教会に与えられた恵みをパウロは証しました。彼らは激しい試練の中にありながら、自ら進んで、その力に応じて、また力以上に献げて、聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと懇願しました。その姿は神の恵みが生き生きと彼らに働いていることの現れでした。パウロはこれを他のクリスチャンの励ましになるものとしてコリント人たちに知らせました。

そしてもう一つのことをパウロは今日の箇所ですべて述べます。それは9節にある「私たちの主イエス・キリストの恵み」です。これはマケドニア諸教会の模範的な姿に、もう一つの模範を加えたというものではありません。9節の文頭に「というのは～だからです」という言葉が原文についていて、9節は前の8節を説明する部分であることが示されています。8節でパウロは命令として言っているのではないと言いました。その理由が9節に述べられていると考えられます。すなわちあなたがたは主イエス・キリストの恵みを知っているからであると。この主の恵みを知っている者たちにとって支援献金は命令されてするようなものではないということです。それは喜びをもって、自然な発露としてなされるべきものであるということです。

その彼らを知っている主の恵みについてこう述べられます。「すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」 「主は富んでおられた」とは経済的な意味ではなく、受肉前の栄光の状態を指すものです。イエス様はヨハネの福音書

17章5節のいわゆる大祭司の祈りにおいて「父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を」と祈られました。イエス様はそのように人として誕生される前に栄光の状態にあられました。その富んでおられた方が歴史のある時点で「貧しくなられ」ました。これはクリスマスの時に人としてこの世に入って来られたことを指します。ピリピ人への手紙2章6～7節がこのことを良く説明しています。「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました」と。さらにピリピ書は続けて「人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました」と述べますように、これは十字架の死に至る生涯をも指します。キリストは私たちのために天の栄光を後にして貧しい者となり、私たちの代わりに十字架上でご自身の命をささげるといふ極限状態まで下ってくださいました。「それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです」とあります。ここにあるのはこの手紙の5章21節でも見た交換の原則です。キリストが私たちの代わりに貧しい立場に身を置き、本来私たちが支払うべき罪の罰を身代わりに受けてくださったことによって、私たちは富む者、永遠のいのちの祝福にあずかる者とされました。この主イエス・キリストの恵みを知る私たちにとって、必要を覚えている人々のためにいくらかの犠牲を払って献金することは命令されて行うというような事柄ではないということです。それは喜びをもってすべきことであり、この恵みを知っている者たちに当然見られるべき応答であるということです。

こう述べてからパウロは10節以降で献金に関する具体的なことを述べて行きます。10節に「この献金のことについて、私の意見を述べましょう」とあります。「私の意見」と断っているのは、これが主の直接的な言葉ではないことを意味します。もちろんパウロの言葉も聖霊の靈感を受けて書かれた言葉ですから権威がないということではありません。しかしパウロはこのように述べて主の直接的な言葉と自分の意見とを区別していたことが先の第一の手紙7章25節や40節にも見られました。このパウロの意見は「あなたがたの益になる」と言われています。これに従って歩むことは彼ら自身に祝福をもたらすのです。

まず彼が述べているのは、コリント教会がこの献金の実行を昨年からはじめて他に先んじていたことです。先にIコリント16章1節のパウロの言葉を参照しましたが、

そのパウロの言葉に応じてコリント教会はすでに昨年からのことを行っていました。その際、「その志を持つことも」とパウロは言います。一見これは順番が逆ではないかとある人は気になるかもしれませんが。志を持つことが先であり、それに基づいて実行があるのではないかと。なのになぜこのような順番で書かれているのかと。それはこういうことでしょう。パウロはここでコリント人が献金を実行し始めたことについて触れています。しかしただそれをするのが重要なのではないのです。志を持つことがまず大事です。そのことはこの後も強調されます。つまりコリント人たちの献金は、その志を持つところから始まりました。そのことにパウロは改めて注目させています。進んで献金をしようという考えを持ったことにおいてもコリント教会は他に先んじていました。このことに基づいて11節で「ですから今、それをやり遂げなさい」と彼は言います。コリント人たちの献金の活動は、先に触れたようにストップしていました。それはパウロとの関係悪化によったのかもしれませんが、他に事情があったかもしれません。しかしあなたがたがしようと思って始めたことをやり遂げよ！とパウロは言います。喜んでしようと思うことは大事です。その心が大事です。しかしそう思っただけで実行が止まってしまっただけでは良くありません。それをしよう！という志が与えられたのに、それを行わないままの状態にあることは霊的に良いことではありません。しようと思ったことを最後まで完成させよ！そのようにパウロは語っているのです。

その際、「持っているものでやり遂げてください」と彼は言います。先のマケドニア人たちは自分たちの力以上に献げました。しかし基準は「自分たちの力に応じて」、「持っているものに応じて」です。その結果、多く持つ人がささげるものは多く、少ししか持たない人がささげるものは少なくとなります。自分が持っているものとの比率で考えれば良いのです。またこれは今すぐこれに取り組めるということでもありません。ある人はもっと多く与えられれば献金できると考えるかもしれませんが。しかし今持っているものに応じてすれば良いのです。大事なことは額の大小にかかわらず喜んですることです。仕方なく文句を言いながらではなく、今あるものの中から進んでささげるささげ物が神に受け入れられるのです。

さて以上の話を聞いてある人たちから、これは自分たちには苦勞をさせ、他の人たちには樂をさせることではないのかという疑問が發せられることをパウロは予期したのでしょう。13節以降でそうではないと述べます。パウロが目指し、図っているの

は「平等になる」ことであると述べられます。ここに今日の箇所です。特に注目すべきポイントがあると思います。コリント人にはこの時、ゆとりがありました。そのゆとりをもって、彼らすなわちエルサレム教会の不足を補うのです。しかし状況が変われば、その逆のことが後に起こることにもなります。大事なことは、そのようにして「平等になる」ことであるとパウロは言います。これは決して聖書は社会主義を理想として教えているということではありません。国家によって強制的に皆が一律に支給・配分されることを理想とするではありません。そうではなく、愛による自由な交わりによって平等を目指すということです。私たちの中には多く与えられている人もいれば、少なく与えられている人もいます。バラエティーがあります。みんな画一的ではありません。神は人間をそのようには造っておられません。多種多様です。そして収入額も色々です。しかしその違いは互いに助け合い、支え合い、愛の交流をするために与えられています。体には多くの器官があり、その間には多くの違いがありますが、それらの違いは各器官が独立して自らを誇るためではなく、その違いをもって互いに助け合い、支え合うためにあるのと同じです。ですから多く与えられている人は、なぜ自分にはこれだけのものが神によって与えられているのかと考える必要があります。それは他の困っている人々に進んで与えて、その人々を支えるためです。愛の交流のためです。そういう責任がむしろその人には与えられているのです。ですから困っている人々や教会があるのに何もせず、ただ自分を楽しませるためにだけ与えられているものを用いることは、その管理を委ねておられる神の御前で、その御心に逆らっていることとなります。パウロはゆとりが与えられている者は、それを与えておられる神の御心に従って、不足を覚えている人々の不足を補うように！そうして平等を図るように！そのことを強制的な仕方ではなく、愛によって喜んで行うように！と述べているのです。

神がそういう御心を持っておられる根拠として最後の 15 節で出エジプト記 16 章 18 節が引用されています。あのマナの出来事を記した箇所です。出エジプト記 16 章 16～18 節：「主が命じられたことはこうだ。『自分の食べる分に応じて、一人当たり一オメルずつ、それを集めよ。自分の天幕にいる人数に応じて、それを取れ。』」そこで、イスラエルの子らはそのとおりにした。ある者はたくさん、ある者は少しだけ集めた。彼らが、何オメルあるかそれを量ってみると、たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった。自分が食べる分に応じて集めたのである。」ここに一人当たり 1 オメルずつ集めよ、と言われていています。1 オメルとは

2.30であると脚注に記されています。自分の天幕にいる人数に応じて、すなわち家族の分を取れ！と言われていています。そうして人々が出て行って、ある者はたくさん、ある者は少しだけ集めました、それが何オメルあるか量ってみた結果、余る人も足りない人もいなかったと言われていています。これはどういう意味でしょうか。ある人はこれは人々が分け合ったからだと見ます。それぞれが集めた量は色々だったが、互いに分け合うことによって不足する人は一人もいなかった。そのようにここを取るなら今日のコリント書の言葉と良くマッチします。すなわちそのようにあなたがたも互いに分かち合い、不足する者が出ないようにしなさい！と。しかし多くの方は、ここをそう取りません。集めに出て行った人たちはこれくらいかと思って集めて、天幕を持ち帰り、量ってみたところ、ちょうど一人当たり1オメルずつになっていたという意味だとここを取ります。出かけられる人が出かけて行って、それぞれ持ち帰る量は色々だったはずなのに、オメル升で量ってみると1オメル×その家の人数分ピッタリだった。そのような奇跡をこれは意味していると。

つまりここに示されていることは神はご自身の民が平等に受け取ることを御心としておられるということです。多く取った者が余らせ、少なく取った者が不足して困るということが起こらないように神はされました。どういう風にしてそうなったのか具体的には良く分かりませんが、荒野における民は、パウロが引用したように「たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった」のです。ここに神の御心は民の間に平等性があること、ある者が多く持つあまりにある者が不足するという状況を良しとされないことが示されています。この御心に照らして自分に与えられた富を用いるように！とパウロは言っています。かつて神は奇跡を通してこの御心を示されましたが、今は愛によってこの御心が実現されることを求める者であるように！と。

私たちは今日の御言葉から「平等になるように」というのが神の御心であることを受け止めさせられます。もちろんこのスローガンのもとに自らの努力を怠って、他の人から支えてもらうことを専ら考えるようであってはなりません。パウロはテサロニケ人への手紙第3章で「働きたくない者は食べるな」と言いました。働くことができる人は自らの働きを通して自らの糧を得るように努力すべきです。しかしだからと言って自分が稼いだものは全部あるいはそのほとんどを自分のためにだけ使うというのも違います。パウロはエペソ人への手紙4章28節で「困っている人に分け与え

るため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」と言っています。そういう祈りとともに労働に励む者でありなさいと語っています。

私たちに与えられている賜物、働き、また環境は色々です。神はそれらの資源を私たちが神のみこころに添って用いるようにと私たちに与えています。より正しく言えば一時的な管理を委ねておられます。私たちはそれら託されたものをどう用いる者たちでしょうか。神は私たちに間に平等が実現すること、不足する者がいない状態であることを御心としています。そのことをあのマナの奇跡において示されました。この光の下でもし自分に他の人に与えることのできるものがいくらかでも与えられていると思うなら、私たちは主イエス・キリストの恵みを知り、感謝している者たちとして、喜びをもって、この恵みのわざのために用いる者たちでありたいと思います。パウロはこのアドバイスに従うことは「あなたがたの益になる」ことだと言いました。私たちはこの勧めに従い、この道を進むところにある益を体験させられながら益々神の御心に従い、やがての日に主から「良くやった！良い忠実なしもべだ！」と褒めていただく管理人の歩みへ導かれて行きたいと思います。